

青い絨毯

坂口安吾

青空文庫

僕らが「言葉」というほんやく翻訳雑誌、それから「青い馬」という同人雑誌をだすことになつて、そのへんしゆう編輯に用いた部屋は芥川あくたがわりゆうのすけ龍之介の書齋であつた。というのは、同人のくずまきよしとし葛巻義敏が芥川の甥おいで、彼はそのころ二十一、二の若年だったが、芥川死後の整理、全集出版など責任を負うて良くやつており、同人雑誌の出版に就つても僕らの知らないことに通じていて、彼が主としてやつてくれたからである。当時は芥川の死後三年目であつた。

芥川の家は僕の知る文士の家では最もましな住家だけれども、中流以上の家ではない。和風の小さっぱりとした家で、とりわけ金をかけたと思われる部分もなく、特に凝つた作りもない。僕の知るのは二階ふたまた二間と離れの書齋二間と座敷二間、それから庭だけ、家族の居間は知らない。日当りの良い家だけれども、なぜか陰気で、死の家とはこんなものかと考え、青年客気のあのころですら、暗さを思うと、足のすすまぬ思いがしたものである。

僕の生れた新潟の家は昔坊主の学校で、だからお寺のような建築であつた。おまけに二ふ抱たかかえから三みかかえ抱たかかえぐらいの天然の松林の中にあつて、ろくろく日の目を見ることが出来ず、鴉からすぶくろうと梟たかかえの巣であつた。坊主の一人が屋根裏の梁はりに首をくくつて死に、その部分だけ一けん間ぐらい切りとつてある。この屋根裏は女中部屋だが、子供の僕は坊主のお化けが出るなどと

おどされながらも梁から梁を渡つて歩いて、あの建築に就て一向に暗い印象を持たないものである。

牧野信一の自殺した小田原の家、あの家にも暫く泊つていたことがある。お寺の隣で、前後左右墓地を通りぬけて出入するという家であり、彼が首をくくつた子供部屋は三畳ぐらいの板敷きの日当り悪い陰気な部屋だが、一向に「死の家」という感じは残らぬ。

それらの家に比べれば、芥川家は高台の日当りの良い瀟洒な家で、屋根裏、病的、陋巷、凡そ「死の家」を思わせる条件の何一つにも無関係だが、僕にとつては陰鬱極まる家であった。葛巻の起居していた二階八畳の青い絨毯など特に僕の呪つたもので、あの絨毯の陰気な色を考えると、方向を変えて、ほかの所へ行きたくなくなってしまったものだ。この絨毯は、僕の記憶に誤りがなければ、芥川全集の最初の版の表紙に用いた青布の残りで、部屋いっぱい敷きつめると、汚れたような黒ずんだ青だ。実に陰鬱な絨毯だ、よしたまえよ、と言つて、あの頃も頻りに呪つて、でも君、葛巻少年、実際彼は少年貴族という感じであつたが、そういう時には急にクスリと老人のような笑い方をして言葉を濁す習慣であつた。彼の好きな絨毯であつたに相違ない。そして、生前の芥川には一切無関係の絨毯であつたと思う。

この部屋には、違い棚の下にガス管があり、叔父（芥川のこと）がこのガス管をくわえて死にかけていたことがあってネと葛巻が言っていたが、なぜか僕は死んだあるじにひどく敵意をいだいていて、この自裁者の心事などには一向に思いを馳せていなかった。又、この部屋では、芥川の遺稿を読まされたこともある。この遺稿は数年後、再読したときに驚嘆した未完の小品で、この作品に就てはすでに二度僕の感想を発表したが、当時は全然わからなかった。否、旺盛な敵意によつて、ろくろく目も通さず押し返して、つまらないと断言したのを覚えている。

この部屋では、よく徹夜した。実にくだらなく徹夜した。こんな下らない原稿ばかりで雑誌をだすのは厭だと言いだすのは葛巻で、いいじゃないか、人の原稿は下らなくても、自分だけ立派な仕事をすればよい、同人雑誌はそういう性質のものだと言って、年中二人で口論する、葛巻は文学的名門に生育した人であるから、自分が編輯にたずさわる以上くだらぬ原稿はのせられぬという誇りを放すことができぬ。もう印刷所へ原稿が廻してあり、校正がでている最中にすねはじめで、あしたまでに何か書いて頂戴よ、とか、之を翻訳して頂戴よ、とか、じゃ君自身書きたまえ、ウン僕も書くけどさ、弱々しく笑いだされると仕方がないので、二人でよく徹夜して原稿を書いた。葛巻という人は、こういう時に、

たった一夜で百何十枚という小説を書く、破りすてて結局一作も発表はしなかったが、実際一夜に百枚二百枚という信じられない書き方をする。毎日丹念に短篇を書いた叔父とは全く似ていなかった。僕も仕方なく翻譯にとりかかって、たった一夜にいくつか相当厚味のある原書を訳してしまったものだ。ジツドの「ワイルドの思い出」という本も三日ぐらいで全部訳してしまったし、マリイ・シエイクビツチ夫人という有閑マダムの「プルウストの思い出」この本も一夜で訳した。尤も、一冊の本ではあるが、有閑マダムの豪華本であるから、全訳して三十枚ぐらいのもの。何分僕は出してフランス語はできないところへ、一晚という時間であるから、辞書をひかぬ、分らぬところは面倒くさい飛ばしてしまえ、というわけで、諸所に五行ぐらいずつ飛ばしたところもある始末で、「プルウストの思い出」でも、プルウストの好きな献立の半分ぐらい料理の名前や原料に知らない言葉がでてきたので、此^{こいつ}面倒と飛ばしてしまった。無責任なことをしたもので、僕の翻譯を読んだ人はプルウストという男は随分皿数の少い宴会をひらく奴だと思ひこんだであろう。ヴァレリーの「ヴァリエテ」などの幾つかもこうして翻譯したものだから、分らぬところはみんな抜かず、結局あの晦^{かい}澁^{じゆう}な原文が、僕の手にかかると明快至極なものになり、原文を知らない人々が讚嘆したものであるが、分らぬ所を抜くのみだから明快流麗、無茶な話で

あつた。翻譯をほめられる度に困つた思いをしたものである。

いったい徹夜というものは壮年健康な時ほど疲労が劇しいようである。近頃は徹夜をしてもさのみ疲れを覚え、徹夜を生活の一部分に心得てしまつてゐるが、あの頃の疲労はひどかつた。事実本を一冊訳しあげるようなワキ目もふらぬ緊張のせいもあつたであろうが、顔に表れる憔悴しょうすいが頭著で、目はくぼみ、顔全体が脂あぶらでキラキラ皺しわだらけで黄色であつた。ウサギ屋のモナカを食い濃い珈琲コーヒーをよく呑んだ。そうして朝は大概カレーライスのお卓しよくよくだつたことを忘れない。食欲しょくよくなどは殆どほとんどなかつた記憶である。

僕は徹夜を呪つた。葛巻がすねはじめると、僕は怒気満々、食つてかかる勢いで口論になるのであつたが、葛巻は女性のように柔和な病弱にも拘かかわらず、自説の執着に至つては話の外ほかで、おだやかな言い方と、弱々しい微笑と、持つて廻まわつた表現で、最後の最後まで食いさがる。結局僕の根負けであつた。尤も、葛巻の主張の方に多くの道理があつたのだろう。なぜなら僕らの原稿が下らないという彼の説は正しかつたし、彼の野心に邪念が少いというのは、彼は有名な文士になりたいなどは考えず、良い雑誌をだしたいということに専一せんいつに考へてゐた。彼はある令嬢を熱愛して、それが生活のほぼ全部であり、そのほかにも別の希ねがいがあるとすれば、三、四の名流婦人に好かれたいという名家の少年らしい願

望であつた。良い雑誌はいわば彼の身だしなみの一つであり、どうしても「良い」雑誌でなければならぬ。下らぬ原稿があつては困る。彼の気風心事は王朝さながら、之に對する僕の心事に至つては粗放蕪雜そほうぶざつ、野武士の心事の如くごとである。天下に名を為なしたいというこゝとだけで目がくらみ、自家の菲才ひさいせん浅学せんがくの如きを恬てんとして念頭におきたがらぬ。この家の自殺したあるじに本能的な敵意を懐いだいてしまったのも、たまたまあるじの書齋を本拠としたために世人の買かい被かぶりを受けたような風説となり、あたら槍やり一筋の手柄に傷をつけては残念だという向う見ずな意気込みによるものであつた。

己れの愛情に就て葛巻は至極率直で、この愛情は一方的な片思いにすぎないのだが、葛巻は万事友人に隠しておらぬ。ただ令嬢に向つてだけ打開けることができないという気の毒なものであつた。だから、良い雑誌によつて身を飾りたい、あわよくば、それによつて令嬢の心を惹ひく一助ともしたい、という願望は純一無垢むくで、原稿の良非に對する追求は邪念がない。ところが僕らは全くの野武士で、拾い首をしてでも立身出世がしたいという根性であるから、純粹な批判によつては不良品でも、商品として通用し、むしろ營利的に成立ち得るような作品だったら、その方がいいじゃないか、というような良からぬ思いを蔵している。さすがにそれを表向きふりかざすわけにも行かないので、あれやこれや持つて

廻つて言い廻しているが、心底をわれれば、君はそういうけれども、案外こんな作品が受けやしないかというサモしい性根が本心だ。

編輯に当るのは葛巻と僕で、時には詩人の本多信が加わることもあつたけれども、大体同人全体は野武士の心を持つている。だから僕が何かにつけて有利のようだけれども、有りていはそうではないので、何と言つても葛巻の純粹な立場には千鈞せんきんの重味があるのである。野武士の僕といえども少年期をすぎたばかりの多感な年頃であるから、曇りなきものに打たれる素直な心を失つてはおらぬ。葛巻の道理に勝てないものが必ず残り、常に心中無念であつた。

ふと昔を思いだす。二十の年、二十五の年、三十の年。京都伏見ふしみの弁当仕出し屋の二階に住んでいた頃は最も太平楽、利根川べりの取手とりでにいた時は水だけ飲んで暮さねばならないうことが時々あつたが、その思い出も楽しいものだ。あと八銭しかない、一週間は金のはいる見込もない、という時に、八銭でソバを食うべきか、タバコを買うべきか、と深刻な難関に逢着ほうちやくする。幾度かあつたが、結局タバコを買うもので、最後の金でウドンを食つたという記憶は一度もない。後日同好の士に訊き合せてみるに、結局タバコを買う方が共通の心事のようである。

だが伏見でも苦しい病気の思い出があった。このとき葛巻に助けられたので今歴々思いだしたが、まだ弁当仕出屋の二階に移らぬ前に、火薬庫の前の計理士の二階を借りていたことがあった。僕が京都に住んだのは、一切友人を離れ、本当に孤独というものを底の底まで突きつめてやれ、という一時の気まぐれに発した移住であったが、計理士の二階で病気になる。背中の手だけは辛^{かろう}じてとどくけれども絶対に見ることの出来ぬ場所に腫^はれ物ができ、構わずにおくと、一ヶ月目ぐらいにだしぬけに高熱がでて、目はくらみ、耳は唸^{うな}り、苦痛のために身体をエビの如くに曲げてみても冷^{ひや}汗^{あせ}が流れ、自然のたうちまわって、まったく意識せずして唸り声を発してしまう。

あいにく月末で、僕自身一文^{いちもん}の金もないのみならず、宿主の計理士が月末の例によって行方^{ゆくえ}をくらませてしまった。彼は常に月末になると行方をくらます習慣で、自然僕が借金取の応待をせざるを得ぬ立場になる。借金取と言っても、事實は家主、八百屋^{やおや}、電燈、水道、そういう当然なる料金の類い。この計理士は五十がらみの年齢に似もやらぬ少年詩人の如き気分屋で、ええ天気やさかい仕事してられえへんどすわと言って大概のお天気の日には外出し、酒も飲まず女遊びもしないけれども、仕事の期日に遅れるために顧客も失い貧乏もするという様子である。細君と別居して自分はこの事務室階下に（階上は僕）ヤモ

メ暮しをしており、一人ぐらしは清々とええどすわと述懐していたが、先生（僕のこと）ウチに気兼ねせんと、ええ人云々うんぬんということをすすめるだけの雅量を失わぬ通人でもあった。だから、月末になると姿を消す。一週間ぐらゐは雲隠れで、之には僕も参つたけれども、他人の借金の言訳というものは極めて気楽でさしたる苦勞でもなかつたから、僕もとりわけこだわらず、雲隠れを咎めとがだてたことは一度もなかつた。又、この男は五十ぐらゐの年にもなり鼻下にヒゲなどというものまで貯えているくせに、ちよつとのことで赤面してマツカになつてしまふという奇妙な好人物であつた。

けれども、身動きならぬ病中に行方をくらまされた時には全く参つた。とはいへ借金の言訳が苦痛だというわけでもない。なぜと云うに、こういう劇烈な病苦になると、世に孤独ほど呪うべきものがなくなつてしまふ。道を通る一人の人の蹻音あしおとですらなつかしい。さらに最もやりきれぬのが夜であり、あの暗闇くらやみであり、あの静寂だ。夜の電燈は僕のイノチで、この光が消えたなら僕のイノチも消えてしまふ。僕の窓の正面に火薬庫があり、崖がけの上を銃剣さげてグルグル廻る番兵の姿が見えるが、病中僕の幻覚はこの火薬庫へ忍びよりたちま忽ち銃剣に追いつめられてとたんに火薬庫が爆発する、はじかれて我に返れば全身の苦痛で、腹這いはらばになり、エビの如くに身をちぢめ、呼吸のかぎり唸りをひく。夜が明けて

くれ。窓の下を誰か人が通つてくれ。誰でもいい、誰か来てくれ。希うことはそれ一つ。借金取の訪れでもよかった。戸が開く。借金取の声がする。アア助かった、嘘うそではないのです、まったく恋人の訪れの如くイソイソと、とはいえ階段を一足降りるにもアルプスの崖をつまぐるていたらくで歯をくいしばり、四這いになって一足一足降りて行く。ただなつかしさで一杯だから、借金取のふくれツ面に向い合うと親愛の微笑が自然に浮び、歌うように借金の言訳をのべたてることのたのしさ。病中唯一の慰めはただそれだった。けれども、電燈の集金人がイキリ立って、電燈をとめてしまふといきまきはじめた時には驚いた。夜の光はイノチなのだ。之を消されてどうして生きていられよう。必死であった。僕が払う。何を売つても必ず払う。一週間だけ待つてくれ、とはいえ全く集金人が憎くはない、彼が訪おもう人であるというばかりでなつかしさには変りがないから、必死に叫ぶ僕の声がやっぱり歌声の如くたのしかった。借金取がひきあげ、戸が閉じ、聲音が去る。はりつめた力がぬけて板の間へへタへタ倒れ、暫しばらくはまったく意識がなくなってしまう。電燈の集金人がともかく一応了解して引上げたあとでは、板の間の上に気を失つて、僕は自然に泣いていた。気がついたとき板の上に一握の涙がたまっていて、昔、涙で鼠ねずみを書いた絵描きの子僧がいたというが、僕の方は一の字をひっぱるだけの力もなかった。

ともかく医者にかかつてみようと思つて、このとき葛巻に電報を打った。どういふ風にして料金をつくり、どういふ風に歩いて電報を打ったかという大事なことが全然記憶にないのである。ところがこの返電が早かつた。待つ身のつらさというが、予期し得ぬ早さのうちに電報が替がといた時の喜びは忘れられぬ。始め僕は葛巻から為替がといたとして、いつたい郵便局まで歩くことができるだろうかということ甚だ不安に思つて、ところが電報が替がとどく。そのよろこびの為ばかりで勇氣は忽ち百千倍、郵便局まで歩くばかりか駈けだすことすら出来そうな起死回生の有様である。

尚又一層馬鹿なことには、まったく馬鹿ゲタ話である。為替を握つて家をでる、十間ぐらい歩いたところで、坂口さん、僕を呼びとめる男に会つた。三宅勇蔵である。この春大を卒業し、京都のJO撮影所の脚本部員となり、僕を訪ねてきたのであつた。窓下を通る人の蹠音すらかなつかつた僕である。友来る。ああ友遠方より来る。夢の如くであつた。酒を飲む。共に盃をあぐる日、かかる日の再びあるべきや。酒をのんだ。まことに不思議な酔い方をした。全身に泥がしみわたり泥細工の濡れ人形に化したような奇怪な感覚がしみ通る。泥酔の極に達し、一夜に医療費を飲みあげて意気高らかに家に帰り、あの怖るべき寢床に怖れ気もなくひっくり返り、電燈などが何じやいと此奴もパチンと消し

てしまつて悠々と眠り、目が覚めると、不思議不思議、一夜のうちに全く熱が去り、突然病気が治つていた。微塵みじんも嘘ではないのです。即ちすなわ、一夜のうちに腫物はれものが破れ、自然に膿うみが流れでたのだ。尤もその後の五ヶ月ほど膿がとまらなかつたけれども、痛みはこの日を境にして拭ぬぐい去られてしまつたのだ。

万事偶然の成行だつたが、然ししか、極めて理想的に病気を退治たいじたということが出来る。なぜなら、後日、三好達治の背中に拳こぶしに余る傷跡を見たからで、彼も同じく腫物を病み、手術をした。手術の途中に氣絶したということで、手術後の半年間苦しんだ。その傷跡は腫物の跡の如くではなく、大砲の破片を受けてそれを引抜いた跡の如くに壮烈である。僕の様子方が遥はるか無難であつたのだ。

けれども、こういう思い出も今となつてはただなつかしいばかりである。貧乏の苦、恋の苦、うしとみし世ぞ今とはという昔の和歌の通りである。

ところがここにただ一つ、明るさ、なつかしさの伴わぬのが、芥川の書齋ですごした青春多感の年月であつた。あの頃は貧乏の苦もなかつた。恋情に瘦やせる思いをしたということもない。希望と若さに溢あふれ、怖れや妥協にまみれることも尠すくなく闊歩かつぽしてはいたではないか。ただ葛巻の正論には最も参つた。表面に弱身をみせぬ僕であるから内心最も圧倒されてい

ただけれども、それは単に理窟りくつの上の話であり、葛巻の芸術に圧倒されたわけでもなければ、わが芸術に自信を失う、絶望した、ということと全然意味が違っている。この時期は、まさしく僕の若さの時、希望の時、伸びようとする力だけの時期だった。

けれども思えば、この時期のあの姿、あの部屋、あの道、あの言葉、なぜか思いだす全てに暗さばかりがつきまとうてくる。まるで、若さは暗い、というかのよう。事実、或いは青春は暗いものであるかも知れぬ。青春には病的自体も健康であり、暗さ自体健全なのだ。けれども、あの希望にみちた時期に、なぜ太陽をふり仰ぎ青空をいつぱいにあびている思いがぬけ落ちているのだろうか。僕はいつも暗い路みちを歩いている。その路は芥川の書齋へ通う路なのだ。暗い部屋で葛巻と対坐している。ペンを握り翻譯さしている。あの部屋は日当りの良い部屋だった。クツキリと青空も見え、絨毯じゅうたんに冬日がさやかに射さしこみ、徹夜の朝の澄んだ夜明けもあったのに。

あれは全く死の家だよ、僕は痛烈に芥川家を呪つたものだ。まったくだよ、こう答えるのは長島萃ながしまあつむで、冷やかすようにニヤニヤあとは無言、あいつは何を考えていたのだろう。雑誌の同人はちよくちよく芥川家へやってくるが、あいつばかりは殆んど姿を現すということもなく、そのうち芥川よりも、もっとハツラツと自殺して死んでしまいやがった。

君は知らないだろうけど、あのウチときたら、下の座敷へ降りると、跽音のないお婆さんがいつも立っていたり、歩いていたり、しているんだぜ。せいが馬鹿に高くて肩幅のひろい角力の瘦せたようなお婆さんなんだ。そのお婆さんが一人かと思うと、たしかに二人なんだね。嘘のことがあるものか。たしかに二人だ。そのくせ俺は跽音をきいた覚えがありやしない。こういう風に僕は長島に言うのである。ワツハツハと彼は笑って無言である。便所から出たら跽音のないお婆さんがカモイの下を歩いて行つたよ、葛巻はニヤリと笑つて之も無言。この絨毯燃しちやつたらどうだろうね。だって、君、君つたら、どうしてこの絨毯が厭なんだろうね。

葛巻はカリエスで肋膜が悪くそのレントゲン写真を僕がひっくり返つて眺めていると彼は頬杖をついて、どう？　なんだか厭でしようとニヤリと笑う。毎日致死量に近いぐらゐのカルモチンをのみ、少年貴族の顔は黄色く濁つて皺だらけだ。カルモチン止したらどうかね。だって眠れないもの。眠れる人は幸福よ。馬鹿馬鹿しい話だよ。叔父さんの亡霊にすぎないのさ。叔父さんと縁を切るのだよ。バッサリと。じゃ眠らせて下さいよ。少年貴族は爽やかに笑うのである。

芥川は自殺したけど、だいたい自殺などというウチじゃないのだね。誰かがあのウチで

殺されている。短刀とかピストルというものが投げだしてあって、それで君、犯人なんか
 必要ないよ。だいたい、そういうウチなんだ。いつだって青空から隠されているよ。僕は
 又こういう風に長島に言う。彼は又腹をかかえて大笑い。

要するに長島は、僕という蕪雑な男はそういう風な困り方をする男で、死の家の暗さな
 どという妙なものをデッチあげて独りで参つてよろこんでいる、要するに一つのポーズだ。
 尤もフロイド風に分析すれば持つて廻つた底の方に謎を解く鍵もあるうけれども、ポーズ
 の方が重要なさ、と思ひこんでいたかも知れぬ。

僕自身僕のポーズに眩惑される傾向もたしかにあるが、正しく敬虔なる心に於て、
 あの家は暗い家だと僕はやっぱり判定する。笑うなかれ。少女の祈りの如き幼い心が今な
 お僕の心に少しく宿り、その言葉が、あの家は暗い家だと言っている。葛巻は暗くない。
 芥川家は暗くない。住む人々も暗くない。婆さんに聲音がないよなどはまこと無礼なる
 悪表現で僕の無躰なポーズのせいに他ならぬ。要はあの時期が暗いのだ。

少年の希望のなんと暗くあることよ。貧乏の苦も、恋の苦も知らず、多くの汚れを知ら
 ず、ただ人生の重さだけを嗅ぎ当てている。希望に燃え、虚名にあこがれ、成功を追いな
 がら、死の正しい意味を知る者はただ青春のみ。最も希望のない時期だ。そういうことも

言えると思う。

そういう時期の一日、暮方駿河台下の道するがだいしたを一人歩いていると、レンコートの青年によびとめられた。見覚えがあるかときくので無いと答えると、そうでしょう、僕のような平凡な男がお目にとまる筈はないのです。僕の一生など僕には分りすぎる程よく分つていのです。安サラリーマン、右にも左にも動く筈がないではありませんか。まだしも失業してはいないだけが不思議です。あの頃は青年の半分ぐらいが失業している時代であつた。

十分か十五分だけ一緒にお茶をのむ時間を与えてくれ、と言うので、手近てぢかな茶店で休んだのだが、彼がだしぬけに言いだした言葉は、あなたには美しい令嬢達のお友達が数えきれないほどお有りでしょうね。そうして、その令嬢達がみんなあなたに思いをかけているに相違ないことも知っています、という途方もない言葉であつた。この男はそれを信じこんで返答の余地もない有様であつた。あなたのように聡明そうめい闊達かつたつ王者のような青年紳士に無数の美しいお友達が出来るのは当然で、自分はアテネフランセの末席から、あなたのようになりたいたいということも考えていた。偶然一人でいらつしやるのを見かけたので思わず呼びとめてしまったけれども、こうして十分か十五分一緒にお茶をのんでいたく光栄だけで充分なので、決して令嬢の一人に紹介していただきたいなどということは

考えていない。令嬢達が僕などに注意を向ける筈が有り得るものではないのですから、と言つて、彼は一人で喋つて、そそくさと立去つてしまつた。尤もこの男はまるでソファアにふんぞりかえるように坐つて、腕組みをして煙草をふかして威張り返つて天井を睨みながら、甚だ自卑的なことをまくしつづけていたのである。

奇妙な話があるものだ。僕には美しい令嬢の友達などは一人もなかつた。僕のことをこんな風に考えている人が有るとするのは不思議であつたが、要するに世の中はこんなものである。誰一人思い通り、望み通りの生活などをしていない人はいないので、みんな他人が幸福だと思つていだけ。

葛巻なども多くの人々に最も幸福な人よと思われていたに相違ない。その葛巻は痩せる思いで令嬢に恋こいがれ致死量に近いカルモチンをガブガブのんで辛かろじて眠りをとつていゝる。世はままならぬものである。先年葛巻が結婚のとき、結婚記念にあの絨毯を燃しちやいなさいと手紙を書いたが、この手紙はどうとう出しそこなつてしまつた。

青空文庫情報

底本：「風と光と二十の私と・いずこへ 他十六篇」岩波書店、岩波文庫

2008（平成20）年11月14日第1刷発行

2013（平成25）年1月25日第3刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 15」筑摩書房

1999（平成11）年10月20日初版第1刷発行

初出：「中央公論」

1955（昭和30）年4月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い絨毯

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>